



161号

2011/3/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



「布堆画(中国のアプリケ)を作る」

於：中国・陝西省延川県/2009年9月

撮影：丹羽朋子

‘わんりい’ 161号の主な目次

北京雑感(52) 清朝と中華人民共和国	2
フィールドノート(7) カメラを通して寄り添うということ	3
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	5
私の調べた四字熟語(50) 危機一髪	6
アジアを読む(74) 「中国はチベットからパンダを盗んだ」	7
媛媛讲故事(32) 怪異シリーズ① 干将・莫邪の剣	8
農民画(17) 竹林の笛吹き	9
四姑娘山写真だより(23) 春節の結婚式	10
福建見聞録(4) 中国人の英語②	11
スリランカ紹介(45) スリランカの世界遺産⑦ キャンディ	12
アフリカとの出会い(50) サイザルバッグ作りの名人	13
黄土高原・やぶにらみの旅(5)	14
中国-城市(都市)めぐり(3) 大連市①	16
【活動報告】① Emme & 小濱明人・早春のミニコンサート	18
【活動報告】② 2011わんりい新年会	18
第8回留学生トークプラザより「アサヒ・スーパー・デアイ」	19
私の四川省一人旅(43) 理塘の街で③ 神の岩山と鳥葬の丘	20
わんりい' 掲示板	22

【写真説明】

中国延川の布堆画は、農村女性の破れた服フットイホアの継当て技法を応用して、1980年代以降発展したアプリケ・アート。写真は、有名な剪纸作家・高鳳蓮さんの布堆画作品《門神・財神・竈君》の制作風景。

素材のざっくりとした風合いの綿布は、中庭の竈かまどの大鍋に湯を沸かし、鮮やかで深みのある色調に自ら染めあげます。剪纸が一人作業なのに対して、パーツを組み合わせ刺繍を施す布堆画の制作は家の女性たちの共同作業。高さんが作った見本を孫娘やお嫁さんなどが家事や農作業の合間に複製し、最後に高さんが地布に貼って仕上げます。「財神の髭には龍を入れる。門神は…」高さん十八番の家の神々のモチーフは、共に作りながら孫達に伝えられていきます。(説明：丹羽朋子)

わりい 159号(2010年12月)の牡丹江市紹介のなかで寺西さんが、どうして日本だけが戦前の軍事行動を攻撃されるのかと中国の人に疑問をぶつけても回答が得られなかったと書いておられました。皆様もきっと同じような疑問を持ったことがおありでしょう。

私も、全く同じで、日本軍のしたことを過小評価しようとか、イギリスを日本と同罪に仕立てようとか言う意図は全くありませんが、歴史的事実を単純に見ても、イギリスは、自分達の売るものが無くなったら、インドのアヘンを中国に持ち込んで社会の崩壊を招き、中国がアヘンの持込を拒否するとアヘン戦争を仕掛けて、結果として香港の割譲(後、返還交渉成立)など、つい最近までその影響を引きずっていたのに、一般の中国人がイギリスのことを話す時は、せいぜい円明園を英米仏三国軍が破壊した事実をいうだけで、あまり深刻な非難の気持は持っていないようなのを不思議に思いました。

独断と偏見でものをいえば、円明園は西太后が軍事費を流用して造ったものなので、破壊されても、西太后に対する「それ見たことか!」という意識が強くて、破壊の張本人に対する非難はかなり緩和されているようです。中国の方と円明園を散歩したり、そばを通りかかったりする時、言外にこんな意識を感じます。

そこで私も、寺西さんと同様、「イギリスの行為の方が中国社会に対する影響が大きくて深刻なのに、反英意識をあまり感じないのはどうして?」と訊ねました。するとその答えは私にとって、ちょっと意外なものでした。友人は、「イギリスがやったことは、清朝に対する行為で、中華人民共和国には関係が無いからだ。」と言うのです。日本人にとっては、清朝も中華人民共和国も共に中国ですが、中国の人達にとって、清朝は今の中国とは関係ない国のようです。これもまた、偏見と独断で言えば、清朝は満州族の国なので、漢族の友人にとっては「自分の国」意識が少ないのかも知れません。

或いは、中国古来の易姓革命思想の表れかも知れませんね。衰退して滅んだ前の王朝にダメージを与えた勢力は、より良い社会を築くために必要な力だったと考えるのでしょうか?いずれにしても、体制の変化に乏しい日本では、ちょっと出てこない発想のように思いますが、如何でしょうか?

おまけに、アメリカは、中国からの賠償金を全額、清華大学の建設費として提供したそうです。イギリスやフランスは、ビジネスとは言え、国を挙げて、中国における水ビジネスに取り組んで、社会生活のインフラ整備に貢献しています。この事実を中国の人々は良く知っています。こんな行為が、英米仏連合軍侵略の印象を弱め、ひいてはニクソン訪中の下地になったのでしょうか。

それに対して、日本はどうでしょうか? 難しいことは分かりませんが、日中両国政府の間で交渉を重ね、賠償の合意を取り付け、日本は、無償援助や無利子の円借款で新生中国を支援してきましたが、そのような事実を一般の中国人は知りません。日本が中国の発展のために果たした役割(それが戦争賠償であったにせよ)を知ったら、日本に対する風当たりも少しはゆるくなるのではないのでしょうか。

因みに、中国の経済発展が進んでからも、日本が暫く円借款を供与していましたが、その頃の借款は利子付きのもので、日中对等の経済活動だったそうですが、それを知らない我々は、「あんなに経済が発展してきた中国に借款を供与する必要は無いのに」と不満に思ったものでした。日中両国民共に、実情を知らないで、お互いの感情をぶつけ合っているように思います。知らないと言うことは恐ろしいことです。

以前、北京市の北郊外にある八大処へ行って山の中のお寺を巡っている時、土台だけになった僧坊があり、そこに「日本軍の爆撃で破壊された」と書いた案内板があったのにビックリしました。北京にも日本軍の爪痕が及んでいるとは知りませんでした。思いがけない所で、日本軍の行為を知らされてショックを受けましたけれど、同時に知ってよかったですと思いました。

存在が良く知られていても、日中で認識が大きく異なる事件について、素人の私は単純に考えるのですが、お互いの資料を持ち寄って両国の専門家が事実の検証をしたらどうでしょうか。時折問題が浮かび上がる度に、中国の人は、「日本はこんなに大きな被害を与えておきながら…」と言い、日本人は「被害の程度には誇張がある。『白髪三千丈』の国だから…」と言っているだけでは埒が明かないと思います。お互いに真実を知り事実を受け入れる必要があると考えます。

殷の時代から甲骨文字で卜辞を書きとめて来た記録好きの中国の人たちです。大部分の人たちは、各地にある抗日戦記念館も、現在の中華人民共和国誕生の過程を記録した施設と捉えているのでしょうか。もう随分前になりますが、日本人5、6人で盧溝橋の見学に出かけた時、現地の方に「見学に来てくれて有難う。日本人でここを見学する人がとても少ないのは残念なことです」といわれたことがあります。

中国を旅行すると、各地で我々を日本人と知ると親しげに声をかけてくれる人々がいます。ご自身日本と関係があったり、親族が日本に行っていたりする人たちで、必ず「日本が好き」と言ってくださいます。日本を知れば、大部分の中国人が日本好きになります。日本でも同様に、中国を知れば中国をもっと好きになる日本人が増えると考えています。こんな処で、微力ながら「わりい」もそのお手伝いが出来れば望外の幸せと思います。

春節明けのある日、中国延川より「朋子のドキュメンタリー番組完成！」の一報が届きました。作者は私ではなく、農村のヤオトンに寄宿する奇特な日本人女性に興味を持った地元テレビ局のディレクター。彼は一昨年の半年間、時々訪ねて来ては私を“密着取材”していききました。日頃、調査協力してくれている延川朋友たちの得になるなら、と渋々承知したものの、撮られる側にまわることがこれほどキツイとは正直想像していませんでした。現地の人々を家庭用カメラで写しながら調査する私を、背後からテレビ局の大きなカメラが撮影するという奇妙な二重撮影の状況では、誰もが身構えてしまいます。さらにテレビ局の企図に合う場面でカメラを回されていると感じるたびに(特に裕福ではない家への訪問や、戦争問題を問いかけられる場面は格好の“ターゲット”です)、自身が紋切り型の異邦人、特に日本人を演じているような奇妙な気分になりました。英語で(カメラで)『撮る』のも(鉄砲で)『撃つ』のも同じ語“shoot”を使うのはい言ひ得て妙。この“狙い撃ち”される体験は、日常的にフィールドの人々にカメラを向けている私自身にとって貴重な反面教師になっています。今月は、そんな陝北をめぐる私の様々な映像体験を振り返っていきます。

### ✂️ 「乾いた大地の嘆きの歌」: テレビや映画の中の陝北

延川の街のとある「婚紗撮影館」(ブライダル・フォトスタジオ)には、白無垢姿の私の大判写真がでかでかと飾られています。時々延安まで車に乗せてくれるオーナーにせがまれ、私自身の神前婚の写真データを進呈したところ、客寄せ写真に使われたというわけです。(実際この店にあるのは怪しい和服風の貸衣装一着です…)

隠し撮りでもないかぎり、こちらが「見る」ということは、同時に相手に「見られる」ことでもあります。特に彼の地の民俗風習を調査に来た私と、陝北の人々が、出会いの入口で双方の文化を表面的になぞる“エキゾチックなイメージ”の交換からスタートするのは自然の成り行きでしょう。しかし、紋切り型の文化的な記号をいつまでも身にまとい続けること、そんな色眼鏡で見られ続けるとしたら、かなり辛いものです。この困難は、片方がメディアという記録の保存と流通の手段を握る巨大な存在である場合、権力的な暴力にもなり得ることはしばしば指摘されることです。

誤解を恐れずに言えば、中国国内のメディアは、陝北という場所、ここに生きる農民たちに対する特定の写し方、いわばお決まりの語り口をもっているようにみえます。エキゾチックな対象としての陝北農民は、白い手ぬぐいを頭



写真1 白い手ぬぐいを頭に巻いた浅黒い肌の男性たちが黄色い土煙をたてて伝統舞踊「腰鼓」を踊りまくる

に巻いた浅黒い肌の男性たちが黄色い土煙をたてて伝統舞踊「腰鼓」を踊りまくる様子(写真1)や、結婚式で籠にせられた女性が起伏の激しい黄色い大地を延々と“お輿入れ”していく行列、或いは暗いヤオトンのオンドルに座って独り剪紙を切る従順な女性の姿として映し出されます。また、早魃に困窮する農民たちの雨乞い儀礼や、望まぬ結婚に嘆き、靴の中敷きの刺繍に好きな人への想いを託し涙する少女などは、“乾いた大地の農民の嘆きの歌”というお馴染みのイメージを上書きする典型的な映像です。

私も調査中に数回、大都市のテレビ局の陝北取材に同行した際、現地で起きていることを撮影するというよりも、前述のような欲しい場面を農民に演じさせ、あらかじめ想定される陝北農村のイメージを撮って帰るという印象を受けました。撮影に協力する地元の人々も「ああいうのはみんなヤラセだ。本当とは違う」と口ぐちに言います。

### ✂️ 自作自演？: 陝北の農民女性の物語を生きること

しかし、このような映像を一概に外の人たちの勝手なイメージづけと片付けるわけにはいきません。革命の聖地である陝北は、建国前夜の歴史ドラマや映画で共産党兵士らが解放する辺境の封建的農村として今もよく登場しますが、それを地元の人々も「自己」の歴史として誇りをもって受け止めています。また、集団生産制時代に村々に演じられた自作自演の劇や秧歌は、オラが村に蔓延する「封建」を批判して理想の新農村を作るという物語の型を反復するものであり、人々にとってなじみ深いこの手法は、時代背景を変えつつ、現代でも生き続けているようです。

昨年延川で見た地元劇団の演劇はその典型でした。劇冒頭、主人公の女性は若くして未亡人になります。「黄河沿いに嫁いだ女は、棗のように“耐寒、耐旱”で、実ったら大地に身を捧げるものだ」という村の長老の言葉を受け、彼女

は嫁いだ「家」に一生献身することを誓います。最後は結局、街の大学に進学して新思想をもった義弟に促されて、主人公は自らの幸せを探し再婚するのですが、この話が多くの観客、特に中年から年配の女性客たちの涙を誘っていたのが印象的でした。剪紙や刺繍の中敷き、雨乞い儀礼…と典型的な陝北アイコン満載でしたが、劇中に登場する陝北農民はみな身の周りに“よくいる”人物像と重なり、主人公女性の心の葛藤は観客たちの一つの自画像、あるいは自身の人生物語を思い起こさせる鏡であったようです。

「陝北の農民女性の物語を、自らもなぞって生きる」という彼女たちの姿を、「あるべき自分を自らが演じる」＝「生きること」として考えてみると、これはわが身にも突きつけられる普遍的な問題だと身につまされます。

よくある物語といえば、以前読んだ、80年代の映画、陳凱歌の『黄色い大地』についての面白い評論を思い出します。この映画は民歌の収集のため陝北農村にやってきた八路軍兵士の存在が、旧時代の思想と慣習に縛られた農家の少女「翠巧」の意識を変えていく物語であり、一見、これまでみてきたようなお決まりの物語を踏襲しているかにみえます。ところが当時、映画の検閲官はこの映画の曖昧な農民の描かれ方を疑ったというのです。それはこの映画の主題である「歌」、主人公の翠巧の声が奏でるその“とらえどころのなさ”に起因するというのが、論者の女性研究者・周蕾の見方です。歌われるのは革命歌であっても、その歌詞（「共産党」という語など）が風や河の轟音でかき消されたり、彼女自身の発する声でありながら、どこからともなく聞こえてきては大地に漂い消えてゆく…。こうした歌の響きは、（歌詞は書きとめられても）個人を取り込み管理しようとする大きな権力（国家）による「記録作業」からすつとすり抜けてしまうというのです。このような映像表現をもって、国家が求める新たな女性像と旧時代の悲しい女性像、どちらにも回収し得ない具体的な「翠巧」という人間の生を描き出す、という陳監督の試みが成功したかの是非は私には判断できませんが、少なくとも定形のあらずしが突き破られたことを検閲官が感じ戸惑ったというのには興味を惹かれます。とはいえ、映画の最後で翠巧は結局、国家や集団にのみ込まれていくように見えるのですが…

### 冠婚葬祭DVDと剪紙パフォーマンス： 物語のない映像

陝北のヤオトンの入口付近の壁には大抵、鏡と何枚もの家族写真(写真2)が飾られていて、客は訪問すると何気なくそれを眺め、住人達は写真を指差しながら家族構成と一人一人の名前、現況を紹介します。

さらに彼らの家に少し長居すると、その家の結婚式とお葬式DVDが出てきて、「見るか?」と勧められます。これは街の専門のカメラマンに制作を依頼するもので、小型のビデオカメラが流通し始めた21世紀以降登場したそうですが、今や家族の行事に欠かせない記録媒体となっていま



写真2 陝北のヤオトンの入口付近の壁には大抵、鏡と何枚もの家族写真が飾られている

す。大きなメディアに映し出されるのが「陝北農民」を代表する匿名、或いは架空の人物であるのに対して、これらの個人的な記録に登場するのはすべて具体的な“名を持った”人物であり、まるで参列者目録を見ているかのようです。

私は一時期、この種のDVD制作のカメラマン助手をしていたのですが、撮影と編集の手法に独特の型があることを知りました。たとえばお嫁さんのお輿入れのシーンでは、見送りと出迎えの車が何台あり、隊列がいかに長く連なったかを見せるショットが必須で、また編集では食事を振舞われる参列者の映像を長く入れます。婚礼の数々の儀式が手順細かく記録されるのは、この家が一切を手を抜かずにきちんとこなしたことを示すためです。

葬儀では大勢が参加して何回も死者への礼拝が繰り返され、参列者への食事の提供が何順ほど行われたか、墓掘りに誰がどれくらい労力をはたいてくれたか、溢れんばかりの花輪などをカメラに収めねばなりません。

撮った映像は自身の研究資料にもなるので、私自身は儀礼の中心人物に近寄ってカメラをまわそうとするのですが、その度に参列する群衆の背後にまわって全体を撮るように四方から指示されて困りました。結婚式も、そしてお葬式もその家と縁故のある人々の未来のために撮られるものであり、そこには“顔がみえる”一人一人の果たした役割や人間関係が記録されることが最重要課題なのです。

ドラマに組み込まれていないこれらの映像には、当然物語はなく、主人公もいません。(新郎新婦や故人の写真群がスライド形式で映像の前後に挿入されるのは、儀礼当日の映像で彼らが中心に撮られていないからかもしれません。)多くの参列者が満遍なく登場し、繰り返しの多い、緩慢とも言える出来事を写した映像が時系列的に繋がれています。しかし、この(私からみると)冗長にみえる時間こそが、陝北農村的な時間の表現のようにも思われるのです。まさにその場を共有した人々が体験した時間そのものを閉じ込めた記録です。

他方、カメラはただ単に起こった出来事を記録するにとどまらず、“カメラで写す”、“写される”という経験自体が人々の考え方やものの見え方に影響を及ぼすという側面

もあります。結婚・お葬式ビデオをテレビで再生し、自らと周りの環境に画面を通して対面することで、ヤオトンが並ぶ村の見慣れた風景や食べなれた食事が「見る」対象として新たな眼で眺められ“再発見”される、ということは往々にしてあることです。

話を剪紙に移せば、延川の剪紙の切り手名人が作家として名声を得る過程には映像メディアとの“共謀”関係がありました。以前は出来上がって貼られた剪紙のみが鑑賞対象だったわけですが、TVや新聞報道によって観衆の前で“冒剪”(下描きなしに紙に直接鋏をいれて形を切り出す技術)を披露する、という制作過程そのものの撮影が慣行となるに従って、短時間で剪紙をマジックのようなパフォーマンスとして見せられる技術が、稼げる剪紙作家の必要条件となりつつあります。今の時代、人々はただ写されるだけの存在ではなく、カメラに映し出され、それを見る経験を通して、自らをも作り替えていくのでしょうか。



### カメラが映し出すもの／映し出さないもの

最後に、映像に写しとれなかったものを表現しようとするある試みを紹介しましょう。先月西巣鴨の廃校の体育館に組まれた舞台で見た、《メモリー》という演劇作品です。作者は中国の著名なドキュメンタリー作家である呉文光と、舞踏家の文慧。舞台の上からは、薄く透けた白い布が吊り下げられ、大きな蚊帳のように四方を囲っています。蚊帳の中でひたすらミシンを踏み布靴を作り続ける老母。この母に対して、娘が文革時代に子供だった自分と家族について問いかけていきます。娘役を演じる文慧は、身体を後ろに不自然に反らせた独特の身体の動きをもって、文革を自身の内部に刻まれた“身体の記憶”としてゆっくりと表現していきます。

他方、舞台上では同時に、ある映像が蚊帳に映写されます。それは呉氏が90年代初頭に撮った映画《我的一九六六》(『私の紅衛兵時代』)で、今は学者やビジネスマン、映画監督になっている元紅衛兵たちが、文革当時の自身の記憶を語ったインタビュー記録の作品です。人々の「語り」の映像は透けた幕の上でゆらゆら揺れて、いかにも表層的で儚げに見えます。その幕の奥に対照的に存在するのは、痛みをともないつつ(非常に難しい姿勢を維持し続ける振り付けなのです)確固として在る生身の人間の体、意味もなく延々と響き続ける老母のミシンの音……。

《メモリー》という演劇はきっと、呉氏による自作のインタビュー映画のひとつのアンチテーゼなのでしょう。単に他人の語りをカメラで映し出しても、届かないものがあることに気づいた作り手のリベンジのような。(私が見たのは2時間バージョンで、本当は8時間の作品だそうです。後者には映画を撮ったときの呉氏の回想などもあるらしく、見た方がいらしたら教えてください。)

さて、私自身は映像作家ではなく、あくまでも調査の資料とするためにカメラをまわしているのですが、ともする

と、もの珍しい“エキゾチック”なシーンや、人々のわかりやすい「語り」ばかりを記録して「撮れた」と思い込みがちです。しかし、その映像を編集して、現地の人々に見てもらうことで、逆に私の独りよがり指摘してもらったり、写されている当事者たちの想いを聞かせてもらえることもあります。さらに映像を通して伝わる「異人=私の眼」が、彼ら自身のものの見方を少しだけ変化させることもあるでしょう。

カメラを通して寄り添い、映像を介して互いを発見し、互いに自分を作り替えていくこと。このような映像体験を通じた交流のなかで、カメラに映し出されないものまでも徐々に理解しあえるといいな、と近頃考え始めています。

### ◆丹羽朋子(にわたもこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍中。中国陝北の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして活動中。一芯社ウェブサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)から、本エッセーのバックナンバーがダウンロード可能です。

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

### 品格や盆梅一輪咲き初むる

pǐn gé dāng qīng gāo  
品格当清高

pén zāi hán méi yī duǒ qiào  
盆栽寒梅一朵俏

huā lěi chū zhàn le  
花蕾初绽了



季语：梅花，春。

赏析：我国宋朝诗人陈亮曾咏《梅花》：一朵忽先变，百花皆后香。欲传春信息，不怕雪埋藏。

而松本女士写的盆景寒梅，重点是歌颂梅花的清高品格。有趣的事，二者都用一朵作为特写对象，令人玩味。

### 春障子合掌の里明るくす

chūn lái zhé lā mén  
春来折拉门

chù chù tuī fàng jià chéng rén  
处处堆放架成人

liàng huà xiǎo shān cūn  
亮化小山村

赏析：此首显现出作者丰富的想象力，具有浓郁的浪漫色彩，堪称佳作。此首和以下三首啞于白川乡之旅途中。

# 危機一髪 (ききいっぱい)

三澤 統

私が調べた四字熟語 50 (最終回)

春のある日、Aさんは奥さんと車で近所のスーパーまで買い物に出かけました。目的のスーパーが見えてきたちょうどその時、左の歩道から一匹の三毛猫が急に車道に飛び出してAさんの車の前を横切ろうとしました。横の座席にいた奥さんが「キャー！ 危ない!!」と叫び、Aさんは大慌てで思い切り急ブレーキを踏みました。が、一瞬轢いてしまったかと思い、恐る恐る前を見ると丁度猫が大急ぎで反対側の歩道にたどりついたところでした。

猫は、まさに‘危機一髪’で助かったのです。Aさんもホッと胸を撫で下ろしました。

さて、辞書を見てみましょう。

## ▲三省堂 現代国語辞典：

「危機一髪 ほんの少しのちがいで、たいへんなことになるという、あぶない状態。注意：“危機一発”と書くのはあやまり」

## ▲三省堂 大辞林：

「危機一髪 髪の毛一本ほどの差で危険が迫っている状態。きわめてきわどい場合。」

と載っており、いずれもわずかな差で危険におちいりそうな瀬戸際の状況を表しています。尚、似た言葉に間一髪 があります。

## ▲小学館 中日辞典：

「千鈞一发 qiān jūn yī fà (一发千鈞 yī fà qiān jūn と同) 危機一髪」

中国語では、成語 千鈞一发 が 危機一髪 と同義になります。尚、发(fa)は“発”または“髮”の簡体字で、四声の第一声 fā は“発”を、第四声 fà は“髮”をそれぞれ意味します。

この成語は「漢書<sup>1)</sup>・枚乗伝」の

「夫以一缕之任系千鈞之重，上悬无极之高，下垂不测之渊，虽甚禹之人，犹知哀其将绝也。」

の部分です。

「一本の糸を以って千鈞(約15トン)<sup>2)</sup>の重さを吊り下げ、(糸の)上は果てしなく高いところに掛かり、下は底知れず深い、愚かな者でも、(その糸が切れたら)助



イラスト 叶霖

からないと分かるでしょう」。

西漢の著名な文学者の枚乗<sup>3)</sup>はすばらしい文才があり、特に中国の韻文の文体の一つである賦に長じていました。

彼はご吳王の劉濞(前215～前154年、劉邦の甥にあたる)のもとで、郎中令という官職にありましたが、ちょうどその頃劉濞は諸侯と諮って漢王朝に謀反を起そうとしていました。

枚乗は何としても謀反を止めさせようと劉濞に次のように言いました。

「王様、例えば一本の髪の毛の糸に千鈞の重さのものがぶら下がっていて、上は目も届かないほど高いところに掛かり、下は底知れぬ深い淵だという状況を想像して見て下さい。この危険な状態はどんな愚かな者にも分かるでしょう。もし糸が上で切られ、下には受け止めるものがなかったとしたら、それは落下して粉々になってしまうではありませんか。今あなた様が兵を挙げて謀反を起し、漢王朝の統治をひっくり返そうとしていることは、髪の毛の糸にぶらさがっている千鈞のものと同じ危険を冒すことだと思います。一步間違えば万丈の深さの淵に落下して、二度と立ち直ることは出来ません。どうか熟慮に熟慮を重ねた上で行動されますように。決して独断専行してご自分の命と王国の前途を失うことだけはなさらないで下さい！」

しかし劉濞は枚乗の必死の説得も省みず、謀反のための挙兵の時機をうかがっていました。

枚乗は自分が王国のゆくへを心から心配して繰り返し忠告したことを劉濞は聞き流していることを知ってすっかり気落ちしてしまいました。彼は巻き添えになら

ないためには呉国を去るしかないと考え、梁国に行き梁国の孝王の食客になりました。

漢・景帝の時代になって呉王の劉濞はついに六カ国の諸侯と共に謀反を起しました。しかし結局彼らは民心を得られず平定され、呉王も首を切られてしまいました。

以後”危機一髪”は非常に危険な状況を説明するのに用いられるようになりました。

#### ■注記

1) 漢書(かんじょ)：中国後漢の章帝の時に班固、班昭らによって編纂された前漢のことを記した歴史書。二十四史の一つ。「本紀」12巻、「列伝」70巻、「表」8巻、「志」10巻の計100巻から成る紀伝体で、前漢の成立から王莽政権までについて書かれた。前漢書ともいう。「史記」が通史であるのに対し、漢書は初めて断代史(一つの王朝に区切った歴史書)の形式をとった歴史書である。「漢書」の形式は、後の正史編纂の規範となった。

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」

2) 千鈞の重さ：1鈞=30斤、1斤=500グラム～30斤=15000グラム=15キログラム。よって、千鈞=15000キログラム=15トンとなります。

髪の毛1本で15トンの重りを吊るとはいかにも現実離れしていますが、そこは“白髪三千丈”の例えもある中国の故事、大目に見ましょう。

3) 枚乗(まいじょう)：前漢の人。字は叔。淮陰(地名)の人。賦や文章を得意とした遊説の徒。

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」

皆様にお読み頂いた「私の調べた四字熟語」は今回の50回をもちまして最終回とさせていただきます。

長らくのご愛読を心から感謝申し上げます。尚、次回からは稿を改めて「私の調べた諺の由来」と題して、日本で使われている諺や慣用語などについて中国故事を調べてみたいと思います。

(三澤 統)

## アジアを読む(74)

### 中国はチベットからパンダを盗んだ

有本香著  
講談社α新書

刺激的なタイトルだが、本の中身は、チベット問題の入門書だ。

著者はアジアを中心に活動しているジャーナリスト。当然、中国人の親しい友人たちを持つ。その友情の篤さを知っているからこそ、教養も思いやりもある友人たちが、ことチベット問題については無理解に教育されていることに、怒りを感じている。

著者は、日本人たちの無関心さにも警告を鳴らす。北京オリンピックの少し前に起きたデモによって、ようやく日本のマスコミが取り上げ始めたチベット問題は、50年以上も前から、そこにある。ただ私たちが気づこうとしなかっただけだ。

“同じ仏教を信仰し、長い伝統を残しながら、発展をとげた日本”―著者によれば、それがチベット人の日本への印象だそう。「いえ、仏教を意識するは年末の鐘くらいで、正月は神社に行くし…。日本の伝統って何だろう…。」と気恥ずかしくなる一方で、チベット人への印象を言葉にできない自分に気が付く。

歴史を遡って100年前、チベットと日本には交流があり、留学生など人の行き来もあった。第二次

世界大戦中に、連合軍が日本と戦うための空軍基地として土地を貸してほしいと依頼してきたときも、チベットは日本との友好関係を理由に断ったという。そんな「貸し」も私たちは知らずにいる。

視点を南西へ動かして、現在もチベット人が数千人規模で亡命しているインド。格差社会に眉をひそめる人もいるが、何よりインドは、多民族、多言語、多宗教の国。憲法で公認されている言語は20以上、地方語は800あるとも言われる豊かな国。著者はそのインドを日本のアジアのパートナーに推薦する。

どんな国でも隣国と仲良くするのは難しいといわれるなかで、インドは適度に距離が離れているし、何よりもインフラ整備や環境対策などの面で日本の技術を心待ちにしてくれている。また、

インドのような異人種と付き合うことで、日本の視野が広がるのではないかと著者は言う。

なるほど、アジアは広い。「日本の閉塞感」なんて言葉を聞き慣れてしまったのは、私たちが視野狭窄に陥っている証拠かも。目の前は行き止まりでも、ちょっと視点をずらしてみたら、今まで気づかなかった道がそこにあたりして。

(真中智子)



今から2500年前の、中国は戦国時代の物語です。

呉の国に、夫は干将、妻は莫邪という有名な夫婦がいました。干将は剣を作るたいそう名高い職人で、ある時、隣の国の楚国の王の命令で剣を作ることになりました。三年の月日を掛けて、やっと雄と雌の二ふりの剣を作りました。

それは素晴らしい剣で、世間の人々を魅了する絶品でした。剣を作り上げて、いよいよ楚王の前に出ることになり、干将は身ごもっている妻に言いました。

「剣はできたが、仕上げるまでに時間が思っていた以上に掛かってしまった。王は待ちくたびれて怒っているに違いない。私はきつと殺されるに違いない。君がもし男の子を生んだら、その子が大きくなったら『家を出て、南に進んだ山に松が一本生えている。その松の裏に私が作った雄剣が隠されている』と伝えて欲しい」。

干将は、雌の剣を持つと楚王に会いに行きました。剣は本当に天下に二つとない見事な鋭い剣でしたが、王の傍にいた剣の鑑定士が、干将が作った剣は雄と雌二ふりあるはず、持って来たのは雌だけだと王に告げました。鑑定士の言葉を聞いた王はたいへん怒り、怒りにまかせて干将を殺しました。

後日、妻の莫邪は男の子を産み、その子は赤と名づけられましたが、普通の子と比べて眉毛の間が非常に離れていたもので、人々から「眉間尺」と呼ばれました。

眉間尺は大きくなり、自分に父親がいないことを不思議に思い、母に「父はどこにいるのだ」と訊ねました、母親は「父は王の依頼で剣を作り、三年掛けてやっと出来上がったが、時間が掛かりすぎて王の機嫌を損ね、王によって殺されました。父は、王に剣を届けに行く時、『家を出て、南に進んだ山に松が一本生えている。その松の裏に父が作った剣が隠されている』とあなたに伝えるよう私に言って家を出ました」と、当時のことを思い出しながら一部始終を息子に語りました。

眉間尺は父が言い遺した話の通り、家のドアを開け、南に山は見えないが、高い建物があり、一本の松の木が高台の上に聳えているのが見えました。「そこに違いない」と確信した眉間尺は、松の下に辿り着くと斧を持ち、松の裏を掘り始めました。しばらくすると、果たして一ふりの見事な剣が現れ出ました。その日から、眉間尺は朝から晩まで父の復讐を遂げることばかり考えました。

眉間尺は身の危険を感じ、山に逃げ込みました。父の仇にまだ報いていないと思うと、眉間尺は益々辛い気持ち

になり、歩きながら泣き、また知らず知らず悲しい歌が唇にのぼってくるのでした。と、一人の男が現れました。「お前はまだ若いのに、どうしてそんなに悲しんでいるのか」と訊きました。

「私は干将の息子だ。父は楚王に依頼されて剣を打ったが、長い時間が掛かったことを咎められて殺された。父の仇討ちをしたいがどうすれば良いかわからない」

と眉間尺が答えますと、男は

「王は千金で君の首を買うと言っている。私を信じることができるなら、君の首と剣を私にくれるといい。君のため私が君の父の仇を討って上げよう」

と言いました。

「それは願ってもないことだ」

と眉間尺は言うが否や、自らの首を切り落とし、男に向かって両手で首と剣を高く差し出しました。しかし、その体は倒れもせず固く立ったままだったということです。

「安心したまえ。私は君の願いをきつと果たそう」

男が眉間尺に約束すると、眉間尺の体は安堵したようにどおっと倒れました。

男は、眉間尺の首を持って都に行き、楚王に会いたいと伝えました。王は、夢の中に現れた少年の首が打ち取られたとの知らせを聞いて喜びすぐ男を招き入れました。

男は王の前に出ると

「これが其の少年の首だ。しかし、鍋で煮なければ災いの種を残してしまうかもしれぬ」

と言いました。

王は男の話信じて、男が言う通り大きな鍋で少年の首を入れ煮始めましたが、三日三晩煮続けても少年の首は全く煮崩れません。それどころか、頭は何回も鍋から飛び出して、大きな目を見開いて、激しい憤怒の表情を見せるのでした。

「どうしたのか」

楚王はその不思議を聞き、そんなことがあり得るのかと驚いて男に訊ねました。男は

「この子の頭は異常に堅い。王が自ら鍋に近づいて見守っていた方が良くと思う。王の威厳を見せれば、煮崩



れるに違いない」

と言いました。

楚王は鍋に近づくと首をぐっと延ばして鍋の中を覗いた瞬間、男は素早く剣を高く上げ、一瞬の内に楚王の首を鍋の中に切り落としてしまいました。兵士達は慌てて男を捉えようとしたのですが、男も剣で自分の首を鍋に切り落としてしまいました。鍋に浮かんだ三つの首は見る見るうちに煮崩れてしまい、どれが誰の頭なのか見極められなくなってしまいました。

その後、人々は鍋の中の頭蓋骨を集め、一つのお墓に

合祀し、いつからか「三王墓」と呼ばれるようになりました。

干将、莫邪と呼ばれるようになった二ふりの剣は、その後の戦乱の中で行方が分からなくなりました。また、其の作り方も謎のままでした。

ごく最近になって、其の二ふりの絶世の名剣をもう一度人々に見せる為、物語の発生地・蘇州で、青銅器製造に詳しい職人たちが、様々な史料を研究し、繰り返し作り直して、ついに干将・莫邪の剣を作り上げ、去年の上海万博の会期中、蘇州館に出品され展覧されたそうです。

## 土の香りのモダンアートXVII

### 竹林の笛吹き

日本農民画協会 平野 理絵  
<http://nouminga.web.fc2.com/>

まだ肌寒い空気にコートは手離せないものの、陽の光はジワジワと力を強めているのを感じます。三寒四温。日本の春は行きつ戻りつ少しずつ近づくので、はっきり姿を現す前の序曲のから、小節ごとの春の魅力を味わうことができますね。

広大な中国では、津々浦々さまざまな春の訪れのパターンがあるのですが、数年前だったでしょうか、私は(上海市)金山に友人達と農民画を習いに行った際に、非常に印象深い春の景色にでくわしました。その年は、「今年は春が遅い」と人々が口にする年で、もう3月も終盤だというのに期待していた桃の花がまだ咲いていなかったのです。

農民画家の陸永忠先生のアトリエの敷地には小さな川があり、川に沿った柳の向こうには一面の桃畑が広がります。午前中ずっと同じ姿勢で絵を描いていた私達は、少し離れた食堂で昼ごはんをいただきに歩く数十メートルの道すがら、体のコリをほぐしゆっくりと田園風景をながめます。本来なら満開の桃畑が見られたはずなのに、とうらめしく枝々に目を走らせると。。。見つけました！ひとつ、ふたつですが、ぽつんと可愛いピンク色の桃の花が咲いています。嬉しかったので、「いちばん桃」の風景をカメラに収めて食事に向かいました。

小1時間ほど後、お腹を満たした私達は、再び見た桃畑に自分達の目を疑いました。花が増えている！さっき咲き始めたばかりなのにもう数十もの花が開いています。とっさに頭に“pop”という英単語が浮かびました。桃というのはこんなにポップコーンがはじけるように元気に咲く花だったかしら。なんだか可笑しくて嬉しくて再びカメラに景色を収めました。春の暖気をたっぷり含んだ大陸の風は、大音量の目ざまし時計のように蕾を起



「竹林の笛吹き」 阮 四娣 画集「金山農民画」より

こしたのでしょうか。

このエピソードを楽しく思い出したので、画集の中に桃の花の絵を探しましたが、桃を見つける前に、この秀作に目が留まりました。

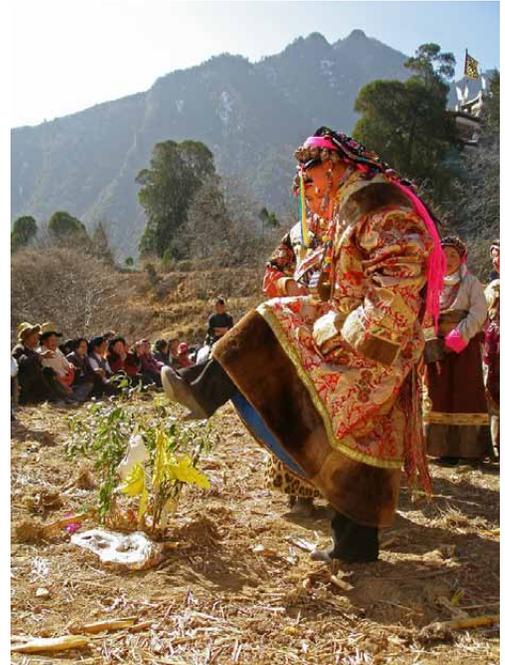
春のポップさを感じる阮 四娣おばあさんの作品です。残念ながら四娣さんは2005年に享年95歳でなくなりましたが、70代になってから絵を描き始めたと聞いてびっくりします。四娣さんが長年培ってきた剪紙や染布や刺繍のアイデアや技術を、はさみや針の代わりに筆で表現した作品は数々の賞を獲得しています。絵の技量というより、農民として生きた彼女の美学や祈りが素直に描かれていて、たとえ見る者が中国文化を解さなくても、何か心をつかまれる、そんな暖気があるここにはあります。

竹林から笛の音にのって、じっとしていられないよ～という春の命たちの歌が聞こえてきそうです。

今年もファンタジーの力を借りて幸せになりましょう。

農業暦新年明けましておめでとうございます。女王谷（現在ギャロンと呼ばれる地域のチベット語の原名“Gyalmorong”の意識）の春節休み2月3日～17日は晴天が続き、終わった翌日に雨が降って農作業の開始を催促するという好都合な天候でした。気温も春節前の厳しい寒さが和らいで暦通りの立春となり、溪谷沿いの柳の新緑も映えるようになりました。

春節休みには遠隔地に出掛けている人達が沢山帰省しますが、その中に休みを利用して結婚式を挙げる人が少なくありません。このような結婚式が私の家内の親戚にも2組ありました。当地の結婚式は50年位前の日本の田舎での結婚式と同様に、花嫁花婿の実家の家屋や敷地に式場や宴会場を誂え伝統的な儀式に則って行われます。丹巴のように自然に恵まれた豊かな農村地帯の結婚式は特に盛大で、結婚式に参列する人が200人位になります。その様子を写真でご紹介します。



**写真3** 式場に入る前に縁起物の麦粉や常緑樹の小枝等を跨ぐ仕草をする女性達。



**写真1** 結婚式の前の宴席で喜び合う参列者達。後方山並みの中央は女王谷の中心に聳えるモルド神山。



**写真4** 式場全景と、花嫁花婿に祝詞を述べに向かう世話人達。式場左側に親戚の男性達、右側に女性達が座ります。



**写真2** 式場の前に整列した花嫁と親戚の女性達。



**写真5** 花嫁（中央）と付き添い達。左端に花婿の顔も見えています。

## 福建見聞録 見て、聞いて、体験した中国 ④「中国人の英語」Ⅱ

為我井 輝忠(前福州外語外貿学院日本語専門家)

前回、中国人の英語力がどんなものか書いてみました。街中で見られるお粗末な英語表現と大学生レベルの優れた英語力の落差といったものを強く感じたレポートでしたが、さらにもう少し街中で見かけた具体的な例を挙げながら述べてみたいと思います。同時に、中国で見かけるちょっとおかしな日本語表現にも目を向けてみましょう。

右の**写真①**をご覧ください。これは福州市内で見かけたレストランの表示看板ですが、英語で“APARTMENT RESTAURANT”、そして中国語で「公寓餐厅」と書かれています。公寓は高級共同住宅を意味し、「マンション食堂」とでもなるのでしょうか。

次に**写真②**をご覧ください。これは福州の鼓山という名勝地で撮ったものです。中国語では「绿色林区 谢绝烟火」と大きく書かれ、意味がはっきり分かります。しかし、中国語の下に英語で、“Green zone Smoke and fire free”とあります。この英語は、“free”の使い方が変です。おそらく“duty-free”、“barrier-free”等のfreeと同じように使おうとしているのだと思いますが、この言葉は名詞にハイフンを付けて「～がない、無料の」というような形容詞句、副詞を作ります。ですから、これだと「煙草と焚火は自由です(自由にどうぞ)」の意になってしまいます。“Green Zone:No Smoke And Fire”とすべきでしょう。

**写真③**は福州市内の五一広場で見かけた注意書きです。“Out of Bounds”と書かれていますが、これは「立ち入り禁止」の意味だと

思われます。英国ではよく使われますが、それ以外の英語圏ではほとんど使用されません。アメリカ等では“Off Limits”、“No Enter”を使います。この注意書きを作った当局者はイギリス英語とアメリカ英語の違いを知って作ったのかはいささか不明ですが、あえてイギリス英語を用いたのには興味を覚えました。

最後の**写真④**は福州市内の大きなスーパーマーケットで目にした表示です。“danhuoli”ってよく見る英国の紳士衣料品のブランドの“dunhill”と大変似ていますね。

字体もデザインも全く同じです。恐らく真似をしたものだと思います。日本製品の剽窃もよく目にします。電気製品や食べ物なども元の名前に似ているものが出回っていて、こんなものまでもと驚くほどです。これはその一例です。

英語に関してはこれ位にしておきましょう。ここでこの項を締めくくるのに際し、おかしな日本語の例を一つ見ていただいて、次号にて中国でよく目にする変な日本語を詳しく紹介したいと思います。

このビルに付けられた看板の日本語の意味がお分かりでしょうか。併記されている中国語と英語を見れば解かりますが、もしなければ全く分からないと思います。英語で“FOOT MASSAGE”と書いてあるので、分かる次第です。中国では一般的に英語より日本語の使い方のほうがめっちゃくちゃなようです。

このビルに付けられた看板の日本語の意味がお分かりでしょうか。併記されている中国語と英語を見れば解かりますが、もしなければ全く分からないと思います。英語で“FOOT MASSAGE”と書いてあるので、分かる次第です。中国では一般的に英語より日本語の使い方のほうがめっちゃくちゃなようです。



## キャンディ

今回はシンハラ王朝最後の都であるキャンディを紹介します。

キャンディは前回紹介したダンブーラから南へ約70Km、コロンボからは東へ約110Kmの距離にある標高300m～500mの高原地帯(ハイランド)にあります。キャンディの名前はシンハラ語のカンディー・ウダ・ターラ(高い山の国)に由来しています。キャンディ出身者は、自分達はハイランド出身だと言って他の地域出身者とは違うという事をさかんに強調します。特にコロンボ出身者との確執には激しい物があります。キャンディは昔のスリランカらしい雰囲気を残した古都と言われています。コロンボが比較的新しい都市の東京とすれば、キャンディは京都と言えるでしょうか。いずれにしても、キャンディ気質と京都気質には相通するところがあると感じられます。

簡単にシンハラ王朝とキャンディの歴史を説明しましょう。インドからの侵攻によってアヌラーダプラを追われたシンハラ王朝は、ポロンナルワ、ヤーパフワ、クルネガラ、ガンバラと逃避行を続け、1474年に中部高原地帯にあった静かな山村に辿り着きました。前述したように、シンハラ語のカンディー・ウダ・ターラから新しい都はキャンディと呼ばれるようになりました。新しい王宮を築くと共に、歴代の王が王の象徴として大切に持ち歩いた仏歯を奉る寺を建立しました。これが仏歯寺です。アヌラーダプラを始め各都に仏歯寺はありますがキャンディの仏歯寺が最大です。

アヌラーダプラを始め、これまでの都は殆どが北部の乾燥地帯に属したために、新しい都を建造する際には灌漑用の貯水池を造るのが歴代の王の慣わしでした。ところがキャンディは温暖な中部高原地帯にあり、1000m級の山に囲まれた盆地にあります。このために水資源は豊富なために灌漑用の貯水池を作る必要はありませんでした。それでも、シンハラ王朝最後の王によって19世紀はじめに12年の歳月をかけて王宮や仏歯寺の直ぐ脇にキャンディ湖が作られました。これは灌漑用というよりは娯楽用だったようで、湖の真ん中に造られた小島は現在でも「王様の遊び場」と呼ばれ、王様のハーレムとして使われていたと言われています。王朝末期になると籬が緩むのでしょうかね。

16世紀初期になるとインドからの侵攻に代わってヨーロッパからの侵攻が始まります。先ず、ポルトガルがスパイスの権益を狙ってコロンボを中心とする西海岸を制圧し植民地とします。ポルトガルはキャンディのシンハラ王朝の存在を認めはしましたが、スパイスの交易権をめぐる両者の衝突は頻繁に起こりました。17世紀初頭にはオランダが東海岸に進出してきました。シンハラ王朝はスパイス、特にシナモンと胡椒の独占交易権を与える事を条

件に、オランダと組む事によってポルトガルを追い出す事に成功しました。ところが、オランダはポルトガルの支配していた地域をシンハラ王朝に返還する、という事前の約束を守らずポルトガルの支配していた西海岸をオランダの植民地としてしまいました。

ポルトガルにしてもオランダにしてもスパイスの交易権独占という事が大きな魅力だったようです。僕がスリランカで住んでいた地域は現在ではコロンボ7という味気のない地域番号で呼ばれていましたが、かつてはシナモンの栽培が盛んな場所で、シナモンガーデンと呼ばれていました。今になって思えば、なんだかスリランカの歴史に触れて生活していたような気がします。僕の住んでいた家から数分のところに、紀元前に在位したと伝えられている女帝の名前を冠したヴィハーラ・マハー・デーウィ公園がありました。此处はシナモンガーデンと呼ばれていた時代の面影が唯一伝えられている場所と言われています。2007年に「わんりい」誌上で紹介した「コロンボでもホテルが見られる」(\*2007年9月号/126号)と「サマーガーデンレストラン」(\*2007年10月号/127号)の話はいずれもこの公園に由来した話でした。(※はわんりいHPで再読できます)

話が脱線してしまいました。オランダとも交易権をめぐる衝突が頻繁に起こるようになり、懲りる事無く18世紀末にはインドを植民地としていたイギリスの手を借りてオランダを追い出す事に成功したのですが、1815年にイギリスによってキャンディは攻め落とされ、キャンディで約300年続いたシンハラ王朝は2000年の歴史に幕を落とす事に成ります。何なんでしょうかね、ポルトガル、オランダ、イギリスの口車に乗せられてシンハラ王朝は末期を迎えた様な気がしています。

キャンディと言えば仏歯寺、世界中の敬虔な仏教徒にとって仏歯寺は憧れの聖地なのですが、僕はこの寺の中に入った事はありません。仕事でキャンディには毎週行っていたので、いつでも入れると思っていたためです。それと、並ぶ事が大嫌いという性格もあります。プージャと呼ばれる供物を捧げる儀式が1日3回行われ、この時だけ仏歯(犬歯だといわれています)が祀られた部屋の扉が開けられます。スリランカ各地だけでなく世界各地からきた仏教徒や観光客で大行列です。何度か意を決して並んだ事もあるのですが、周りの熱気に負けて次の機会にしようと思っさり退散してしまいました。それで、結局は行かず仕舞いです。

そんな訳で仏歯寺の内部の説明は出来ないのです、申し訳ありません。興味をもたれた方は「○○の歩き方」その他のガイドブックを御覧下さい。

今回は沢山の子供を育てる、未婚のママ・オザヤについてお話をしました。その中で、ママ・オザヤはビジネスをしていると書きました。オザヤは中央ケニアに属し、キクユ族が多く住む地域です。キクユ族は、昔から農耕民族で、自分たちの土地で、とうもろこし、豆類、芋類などの主食や、スクマと呼ばれる野菜、トマト、玉ねぎ、バナナなどの果物を育てています。ママ・オザヤもそんな農作業の合間にビジネスをしています。そのビジネスとは？

キクユ族の女性は、手先が器用で家庭で使ういろいろなものを手作りします。衣服やカバン、ソファやイスのカバー、テーブルクロスなど縫い物や編み物が得意です。お店に行くと、生地や糸、毛糸が豊富に売られています。ママ・オザヤは其中でも「キヨンド」と呼ばれるカバンを作る名人です。

このカバンは、アフリカ地域で自生するサイザル麻を使って作られます。サイザル麻は、いたるところに生えていて、それを引き抜いてきて、皮をめくると繊維質のものが出てきます。詳しくは、リュウゼツラン科リュウゼツラン属の繊維植物だそうです。大きなものは人の身長くらいにもなります。その繊維で、ロープを作ったり、カバンを作ったりするのです。

キクユ族のキヨンドは、このサイザル麻と毛糸を上手に組み合わせて手で編みこんで作られます。サイザル麻はそもそもロープに使われる丈夫な素材。重いものを沢山入れても大丈夫な耐久性の優れたカバンが出来上がります。農耕民族の彼らは、このカバンに沢山の畑から採った野菜を入れて運びます。ジャガイモを山盛りにいれても破れません。また普段使うカバンとしてもデザインがおしゃれなものも沢山あります。

ママ・オザヤが作る「キヨンド」はデザインがとても美しく、また無限にある毛糸の色の組み合わせも圧巻です。デザインの勉強したわけでもない彼女ですが、その仕上がりにキクユ女性たちは感動します。私も初めて彼女の村を訪ねて、泊めてもらってその作品を目にしたその日からママ・オザヤの手仕事の大ファンです。早速、「私にも作って」と頼むと、まずは「自分でも作ってみなさい」と毛糸とサイザル麻をくれました。そして手のひらサイズの小さなサイザルバッグを一緒に作ってくれました。私は毛糸を2色使うのがやっとな複雑な模様も入れることが出来ませんでした。とても根気の要る作業です。しかし、うまく出来なくてもママ・オザヤは笑顔でゆっくり教えてくれます。

「急がなくてもいいからね。焦っても得することなんてないからね」

「使う時に、楽しい気分になるように気持ちを込めてね」

「糸だけだと何も出来ないけど、こうして織ってあげると



ね、荷物が運べる。すごいと思わない？」

「模様って面白いと思わない？ 何十年作っていても、同じ模様にならないの」

「心が乱れると、模様も乱れてくるのよね。美しい気持ちで取り組んでみて」

ママ・オザヤのキヨンドは、類まれな技術と持つ人のことを考える優しい気持ちで出来ているんだと感心しました。一日に一つ必ず作れるわけでもない、大きな市場に売り出しているわけでもない、宣伝しているわけでもない彼女のキヨンド。農作業に励んだり、お出かけしたりするその村の女性のために作って生計を立て、それで得たお金で家族や村の女性の子供たちを育てたり、時には学費も工面したりさえします。そんな彼女を私はとても素晴らしいものと感じますし、自分が出来ること、社会に貢献し、社会もそんな彼女をすばらしいと思い、尊敬しています。

ケニアは経済的にはまだまだ発展途上国かもしれませんが、それでも人々はすべての人を受け入れる心の広さがあるように感じます。人はそれぞれ違って当然なのです。自分と異なる生き方をする人を好奇の目や偏見の目で見たりせず、自分の基準で評価しません。私がケニアにいる時にいつも感じていたあの居心地のよさを思い出して見ますと、「外国人」であることを意識せず、「奥さんやお母さん」でもなく、あるがままの私自身でいられる安心感がありました。ママ・オザヤが今の日本で生活したら、誇り高い彼女自身でいられるでしょうか？お土産にもらったキヨンドを眺めながら、そんなことを考えたりするのです。

## ◆ 黄金の滝・壺口瀑布

翌朝は7時に出発の用意をしてロビーに降りて行くと、既に昨日の4人の方々が出てくださった。今日一日我々に同行して下さるとのことで、早速、車2台で出発した。

朝食は10分ほど走ったところで、歩道にテーブルを並べて食べさせている、中国ではお馴染みの食堂で、毎度同じようなものを注文した。この種の食堂が食べさせるものは、お粥・包子(肉饅頭)・ワンタン・油条・豆腐腦・豆乳・ゆで卵等同じようなものが多いのだが、その味は店によって微妙に違う。往々にしてテーブルや地面が汚れている店で美味しい朝食にありつけるのは、客が多くて店員のテーブルの後片付けが遅れるので、客が勝手にテーブルの上においてある、紙ナプキン代わりにティッシュペーパーを使ってテーブルを拭いて床(道路面)に落とすからで、汚いのはお客が多い証拠、人気のある店の勳章のようなものだ。この日の朝食も、前の客が食べ散らかしたテーブルを自分たちで片付けてから、豆腐腦と油条を食べた。

朝食が終わると、我々一行10人は、2台の車で出発した。周路さんの友人4人が1台の車で前を走り、我々の車が後に従ったが、前の車はスピードを出してすぐに見えなくなってしまった。暫く行くと、その車がガソリンスタンドに停まっていた。傍らに停まって待ったが、どうやらガソリン補充以外にも用事があるようなので、こちらが先行することになった。

道は2車線でまっすぐに走っており、いつの間にか歩道が無くなり、2車線の外側にもう一車線増えて、自転車や歩行者用らしいが、路面の高さに違いが無く、道の両側にも殆ど何も無いので、開放感を味わいながらのドライブが続いた。15分程すると、4人組の乗った車が追いつき、そのまま先へ行ったしまった。我々の車も90キロぐらいは出しているのに、彼らの車は100キロ超のスピードで走っているようで、直線で平坦な道にもかかわらず、直ぐに見えなくなってしまった。その点、我々の車の運転手楊さんは安全運転で、いつも100キロ以下で運転して下さるので安心して乗っていられて有難かった。

暫く適度なスピードで走っていくと、彼らの車が路肩に停

まって、4人が外に出て屈伸運動などをしながら我々を待っていてくれた、我々も車の外に出て見ると、満々と水を湛えたダムが見えた。遠くに見える黄河は壺口瀑布の下流に当たる流れなのだと説明を聞いた。まだ何も見えないけれど、壺口瀑布に大分近づいたようだ。

この後は、4人の車も我々の車と同じようなスピードで前を走るようになったが、何時の間にか道が下り坂になり、やがて路面の舗装が切れて車がガタガタ進むようになると、目の下に大きな工事現場が現れた。進行方向右側が谷になっていて、ずっと下のほうに作業用車両が小さく見えて動いていた。



た。橋脚のようなものが出来つつあるので橋を作っているのかと思ったが、周路さんもはっきりとは分からないようだった。工事はかなり大掛かりなもので、3,4年経つと又何か目を見張るような変化が起こるのだろうと充分想像出来るものだった。

道は再び舗装されて、右手眼下に黄河本流を見ながら進むと、やがて壺口瀑布の歓迎アーチをくぐった。駐車場に車を停めて先へ進むと、何時の間にか水成岩の岩畳を歩いていて、水音が聞こえるようになって来た。右手へ歩いて岩の端に行くと、思いがけず直ぐ近くを黄河の水が勢い良く流れ下っていた。そこから水が流れて来る方向を見ると、大きな落差で、紛れも無い黄河の水が流れ落ちて来ていて、「黄金の滝」が姿を見せていた。

「壺口瀑布」と言う名前を聞いて、私は勝手に、流れ落ちる滝を下から見上げる景色を想像していたが、実際は見物人が水の落ち口近くで水の落下を見る滝だったのだ。ちょうどナイアガラ滝のようだが、こちらのほうが、水の落ち口に続く岩棚に立って見ることが出来る。その日の水量によって立ち入り出来る範囲が決まるそうで、この日は、数日前に降った雨、即ち我々が延安まで乗るはずだった列車を西安でストップさせた雨の影響で、この時期としては例外的に水量が多く、立ち入り禁止の範囲がかなり広がった。

大勢の中国人観光客に混じって、滝の落ち口から遥か下まで水量豊かな黄河が流れ落ちるのをたっぴりと見物した後、再び車に乗って少し上流へ向かい、黄河に架かる橋を渡って山西省に入った。山西省側のほうが観光地としてより整備されているようで、お土産屋さんが軒を連ね、レストランが立ち並んでいた。その中の一軒で昼食をとった。

大勢の中国人観光客に混じって、滝の落ち口から遥か下まで水量豊かな黄河が流れ落ちるのをたっぴりと見物した後、再び車に乗って少し上流へ向かい、黄河に架かる橋を渡って山西省に入った。山西省側のほうが観光地としてより整備されているようで、お土産屋さんが軒を連ね、レストランが立ち並んでいた。その中の一軒で昼食をとった。

山西省に入ったのだからと名物の刀削麺を食べたが、特に印象に残るような味ではなかった。それよりも昼食のために黄河を渡って山西省に来たことが嬉しくて、良い思い出になった。

昼食の後、再び橋を渡って陝西省に戻り、黄河を離れて西に進んだ。この道もまた4人組の車はスピードを上げて先行し、直ぐに見えなくなってしまった。まっすぐに伸びた変化に乏しい道を大分走った頃、先行の4人組が車を停めて待っていてくれたのは、宜川県の革命記念碑の前だった。革命時の農民英雄を称える記念碑のようだが、碑そのものよりも壺口瀑布からの帰途一休みするのにちょうど良い休憩スポットとして存在するようで、西瓜や飲み物、土産品などを売る屋台が並んでいた。

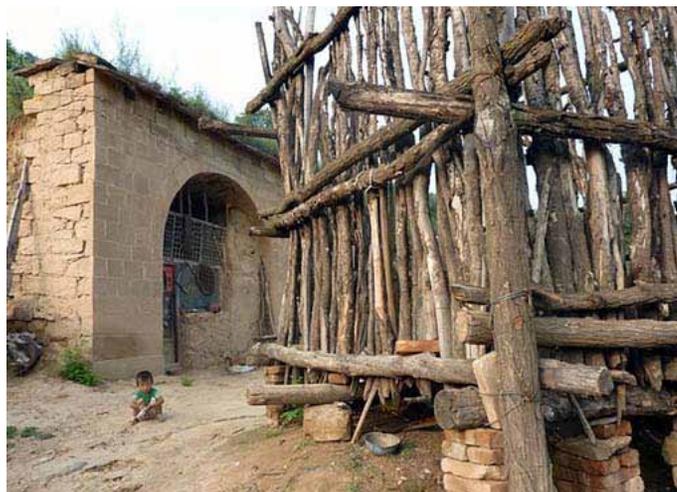
先発4人組は西瓜を買って、席を用意して待っていてくれた。カンカン照りのなかで食べる西瓜はとても美味しかった。ここで暫く休み、屋台の土産物屋を覗いてから、再び車に戻り甘泉へ向かって出発した。

### ◆ 緑豊かな山村、孫家河村

そろそろ甘泉に到着かと思う頃、車は黄河の支流と思える小さな河原へ下り、対岸の小道を登り始めた。川辺の背の高い草の中の細道を暫く登って、更に細い道が登っていく手前で車を止め、徒歩でその細道を上ることになった。日は大分傾いて来たが、まだかなり暑さが残っていた。しかし緑濃い坂道を登っていくのは気持ちが良くて、苦にならなかった。

歩きながらスイッチバックを4回ほど繰り返したところで、一軒の農家の庭先に差し掛かった。緑の中に埋もれるようにヤオトンがあり、一家と思われる5人ほどの人々のんびりと話をしながら手仕事をしていた。4人組の中のお一人が彼らと知り合いのようで、言葉を交わしながら、周路さん、運転手の楊さんを含めた他の中国人の方々とも何か話して笑い合っていた。家の前には小さな平地があって、そこには枯れ枝を組み合わせて高さ2メートル近い大きなバケツのようなものが建っていた。材料は直径2～3センチで、完全な蔓では無いが蔓性の強い枯枝を、丁度粘土で花瓶を作るように、逆円錐形に積み重ねたもので、上の口の直径も2メートル近い大きなものだった。現在は何も入っていないが、秋にトウモロコシを収穫して貯蔵する器だそうで、中のトウモロコシは下の方の枝の間から引き出して使うのだそうだ。今は丁度去年のトウモロコシを使い切ったところで、間もなく収穫するトウモロコシをいっぱい詰めて来年の冬までの食料とするのだそうだ。

更に登って行くと、上から天秤に空のバケツをつけた男性と、松葉杖をついた女性が降りて来た。お二人はご夫婦だそうで、ご主人は下の方へ水を汲みに行くところだったようだ。奥さんの方は杖をつきながらも、手に濃いオレンジ色の稚児ユリのような花を持っていて、我々にくださった。花の名前



トウモロコシ貯蔵庫、丸型もある

を訊くと、“山丹丹花(山が真っ赤に染まる花)”と言うのだそうで、もっと上に行けば咲いているところが見られると言われたので、元氣百倍、花の群落を見に行くことにした。我々が登ると、ご夫妻も水桶を置いて一緒に登ってきてくださった。後で分かったことだが、登った先にはこのご夫妻のヤオトンがあり、例の花はそのお庭に咲いているのだった。

我々が勝手に誤解して、山の上に自生の群落があるのかと思っていたのだが、実際はヤオトンの前庭に、花壇を作りダリアや“山丹丹花”が綺麗に咲いていて、それを見せてくださった話だったのだ。庭はヤオトンの前のなだらかな斜面を利用した狭いところだが、良く手入れがされて、花のほかにも小さな実をつけたリンゴや栗の木も植わっていて、緑の中に埋もれたヤオトンの前にテーブルと椅子が設えてあり、食事が出来るようになっていた。庭の一隅には枯れ木を並べた囲いがあり、5,6羽の鶏が自由に歩き回っていた。

花と緑に囲まれて、心地よい涼風を全身で受けながら休んでいると、我々の後から不自由な足を省みず引き返してくださった奥さんが到着して、お庭や花の自慢話をしながら、我々に水を勧めてくださった。水は、先ほど会ったときのように、バケツを天秤棒に吊るして下の方へ汲みに行かなければならない貴重品なのに、大勢の人間に水を勧めてくださるお気持ちをうれしく感じながら、水は辞退し、代わりにリンゴを頂いて帰途についた。

かねがね、黄土高原が紹介される時は、その厳しい自然条件を写した写真が殆どなのに、その地に根ざす文化は多彩で、そこに暮らす人々の気持ちはおおらかでやさしいのが不思議で仕方がなかった。今回初めて夏の黄土高原を目の当たりにして、黄土高原が、厳しい冬の写真から私が勝手に創造していたような貧しい土地ではなくて、意外に生産能力が高い土地であることを実感した。夏は地力が盛んで、耕作の努力に十分応えてくれるので、そこに住む人々は冬の間心豊かに生活し、伝統の文化を育むゆとりが生まれるのだろうと私なりに納得した。特に、今日案内していただいた孫家河村で強くそのことを感じた。ここには都会とは違った独特の時間が流れているようだった。

(次号に続く)

今回は、私が2年間滞在した大連市である。その歴史や私が勤務していた会社(大連日通集装箱制造有限公司)のこと、また中国人の習慣など旅行ガイドブックに書かれていないようなことを書いていこうと思う。

さて、大連市だが、日本でも大連でも「私は大連で生まれました」とか「祖父は満鉄に勤めていました」など大連にかかわりのある人が思っていた以上に多いのに驚いた。日露戦争の勝利とその後の満州への移住者の多さ、又、近年大連進出の日本企業も多いことなどから日本人の多くは大連に特別な親しみを持っているように感じた。

大連市は行政的に見ると行政区はかなり広い。そして市の下に普蘭店市(プーランドィエン市)とか瓦房店市(ワーファンディエン市)などの市があり、日本の行政割の感覚からすると少し奇異に思える。人口は約600万人と横浜市や大阪市より多いが、いわゆる旧市街というか、狭いくくりの大連市は250万人前後といわれている。それでも多いと思うがなにしろ13億人の国であるから1ヶタ違うようだ。ちなみに遼寧省の省都である瀋陽市(シェンヤン市)は約800万人くらいである。従って人通りはどこに行っても多くレストランの多くはどの時間帯に行っても、人、人、人で慣れないうちは疲れてくる。日本のようなさびれた「シャッター通り」などはない。

歴史を見ると、1899年に帝政ロシアが大連港や旅順港の建設を始めたところから始まる。つまり歴史に名を残す大連は、たかだか111年の歴史しかないわけである。ロシアは1898年に当時の清(満族の建てた国。テレビ化された「蒼穹の昴」に詳しい)から遼東半島を租借し、旅順を軍港として拡充しはじめたが、商業港としては狭く、そのため大連の都市建設を本格化させた。そして大連はロシア語で「遠方」を意味する「ダーリニー」或いは「ダルニー」と呼ばれた。それ以前は漁村であり、又この地方は土地に上質な青泥を含んでいることから「青泥窪」(チンニーワー)と呼ばれていた。日露戦争(1904～05)で日本が勝利し、占領したあと、1905年に「大連」という名前がつけられたのである。それから1945年の敗戦まで40年間この地を支配した。そして町名から通り、広場、橋などに日本名をつけていった。

大連発展の中核は、1906年設立された南満州鉄道株式会社(満鉄)である。初代総裁は、あの「後藤新平」である。大連駅から歩いて10分くらいのところに有名な中山広場(昔は「大広場」と呼んだ)がある。中国国内を旅行すると丸いロータリー状の広場があちこちにあるが、ここもロー



旅順駅 満鉄時代に建設されたまま残されており、今でも使用されています

タリーとなっている。その周囲に旧横浜正金銀行や満鉄の直営だったヤマトホテルなど当時の建物がそのまま残ってそれぞれ使われている。タイムスリップしたようで風情のある広場である。夜ともなればライトアップされとてもきれいで夢の中にいるようである。中山広場から歩いて数分のところに旧満鉄本社がある。築約100年であるが、この建物もちゃんと「大連鉄道有限公司」が使用している。ヤマトホテルも今は「大連賓館」と衣替えし、3つ星ホテルだが、当時をなつかしむ日本人の旅行者の中には、わざわざこのホテルに宿泊する人もいるという。

ホテルについて少しふれると、大連市の中心部はシャングリラホテルやスイスホテルなど5つ星ホテルが8ヶ所あったと思うが今は少しふえているかも知れない。市内の中心部から30数km離れた所に経済開発区があり、日本からのメーカーを中心に約350社進出しているが、この地区は4つ星ホテルが最高であった。しかし設備の改善を行い、2009年春に「銀帆ホテル」が5つ星に昇格した。この経済開発区に私の勤めた大連日通があり1991年に進出した。進出した当時は日本企業も少ししかなく当時の写真を見ると周囲は空き地ばかりでインフラも不十分であり、ホテルもまともなホテルはこの銀帆ホテルくらいだったと言う。当時この現地法人を設立する時の担当者は皆このホテルに泊まりながら仕事に励んだとのことである。彼らは冬は零下15°～20°くらいの中で働き、休日は飲み屋もほとんどないためホテルのレストランで飲むしかなかったようだ。今は高層ビルが林立し、当時はなかった電車も走り、日本料理屋も数えきれないくらいあちこちにある。

2007年7月に赴任した時、前の総経理がシャングリラホテルの住宅棟の21階にいたため私はその部屋を引き

継いだ。引き継いだ時、その部屋の広さに驚いた。5つ星だから設備や雰囲気もよい。しかし家賃もその分高い。私は単身赴任であったのでもったいないと感じ1年後ラマダホテルと言う4つ星のホテルに引越した。このホテルは大連駅のすぐそばで便利なおところにある。

このあたりで大連日通について書いていきたい。会社の名前を見ただけでは何の会社か分かる人は少ないだろう。集装箱とはコンテナの中国語である。製造の制は、「製」の中国の正式な漢字である。つまり日本通運の使用する海上コンテナを造るメーカーである。当時は材料の鉄板の品質が中国製品はあまりよくなかったため、韓国あたりから輸入して製造し日本に送ったそうだが、今は品質も向上し、全量中国企業から仕入れている。コンテナを造り始めたが、コンテナの空箱だけ日本に送るのは非効率ということからロールボックスも造りコンテナの中に入れて輸出するようになった。

会社は、8時から始まるが5分前から全員構内で体操をやることからスタートする。この体操は日通体操(日通グループには独自の体操がある)ではなく、中国で一般にされている体操のようだ。工場の敷地は5千坪で50年間の賃借契約である。中国全土は基本的に法人、個人を問わず所有権は認められない。国の所有なのであるから建物が建つていようと必要ならすぐ立ち退かせて道路や鉄道を造ったりする。日本では都市計画を策定したあと20年も30年たっても実現しない道路がいくつもあがるが……。

会社の終業時間は5時である。日本人とちがって中国人は今日中にやるべき仕事が残っていても時間が来れば残業はやりたがらない。ましてや日本のような「サービス残業」などありえない。もっともこの点は世界的に見ても日本が特殊な国であるようだが……。

中国人のよいところは親兄弟は当然であるが、友人とか世話になった人はとても大切にす。信頼できると思う人には損得抜きで物事に対処する。一般的に組織的なつながりは弱く人と人とのつながりはとても強い。会社のために粉骨砕身するなんて発想はほとんどの人は持っていないのではないだろうか。

大連日通の社員は90数名である。(コンテナやロールボックスの大量注文が続いた10年前には150～170名いた)私のいた2年間で社員の結婚式は4回あり、都度スーツにネクタイを着用し主賓として中国語で挨拶をした。勿論私が書いた日本語の文章を通訳に頼んで中国語に直したのを見ながら発音に注意してしゃべったのだが、皆日本人の総経理(社長)が中国語で挨拶をするのがめずらしいらしく静かに熱心に聞いてくれた。

結婚式は日本と中国では大いに違う。まず「スーツにネクタイを着用し」とわざわざ書いたのは、結婚する本人と主賓の私以外でスーツ姿の人は一人もいないからである。

特に男は普段着で出席する。最初に出席した時、この人たちは何故スーツ姿(礼服でないにしろ)で来ないのかと思ったが、2人目の人も3人目の人の結婚式も同じ様子なのである。料理は大きな丸いテーブル毎に山ほど出てくる。3分の1も食べられないのに残ったものはどうするのだろう。本当にもったいないと出席する都度思った。どうも面子の問題のようだ。式の途中で新郎新婦は腕を組みながらバスケットに入れた酒とタバコをもって各席をまわりはじめる。酒もタバコもやらない私にとってこの時間は少し苦痛である。

酒はぐっとがまんして少し飲むが、タバコも必ず火をつけてくれるので吸ったふりをしなければならぬ。いつの時代からこのような風習が出来あがって来たのであろうか。それとも大連だけのものなのか?一通りセレモニーが終わり料理もある程度食べると出席者は自由に会場を後にする。とにかく最初から最後まで日本の式とちがった。

結婚式に限らず日本と習慣の違うものは数多い。例えば花火大会は日本では夏の風物詩である。ところが中国は春節(旧正月)や国慶節(10月1日)の時や何かイベントをやるときに打ち上げる。春節のとき宿舎であったシャングリラホテルが用意したバスで出かけたが、バスから下りて10分もたたぬうちに寒くて花火見物どころではなくなる。何もこんな寒い時にやらなくてよいのにと思いつつすぐバスに乗り込んでホテルに戻った。

もう一つ春節の時の爆竹であるが、そばで見ると爆発するようにはじけ、そばにいるとこわいくらいだ。ホテルの部屋にいても耳をつんざくような音が昼夜を問わず入ってくる。ある人に聞くと昔から悪魔よけだとの言い伝えがあると聞いていたが、この音を聞けば悪魔も退散するだろうと思った。

**‘わりい’ 会員の皆様**

**そして入会をご希望される皆様へ**

**毎年4月から新年度になります。**

**おたより会費の納入をよろしくお願ひします。**

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPをご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

## 【わんりい活動報告】

早春ミニコンサート Emme(唄) & 小濱明人(尺八)

2011年2月18日 於:野津田の隠れ里・乃平庵

乃平庵でのミニコンサート第2弾。熟女と幼子が同居したような魅力のあるEmme(エメと読む。日本女性。彼女の友人が考えてくれた芸名)さんの唄と、さわやかで凜とした小濱明人さんの尺八演奏。

この日は早朝まで風雨が激しく、その後徐々に晴れてきましたが風の残った日でした。そんな日にふさわしいオリジナル曲「風音」という唄で始まり、「ゴンドラの歌」、宮崎県民謡「稗つき節」、「刈干し切り唄」。Emmeさんは大学で長唄を勉強されたとのことでその影響が独特の唄声を醸し出していました。

その後、尺八のソロで「最上川舟歌」。そして尺八とくれば私たちに浮かぶ幼い頃ミステリーでこわい感じを抱いた虚無僧さん—そういう人が吹いていたという古典の「打波」。なぜかこの演奏の時は吹いていた風が一層強まり、雑木林のうねりの音と尺八との競演となり、私たちは一体感を感じました。

後半はなつかしい歌「この道」、「雨降りお月」、「りんご追分」。それを聞く私たちは体にしみ込むような唄と尺八の音色にうっとりでした。最後の曲は、Emmeさんの友人が作ったという「輝きの音」。生まれた子のために曲を作りその子の誕生日や結婚時に歌う風習のあるアフリカの部族のことを知って作ったとのことでした。この時も曇天ぎみの窓越しの木々に、早春の光がさして風も和らぎ、この唄にふさわしい景色が広がりとても印象深いものとなりました。アンコールは今、丁度満月なので「月」という曲を小濱さんが提案されしめくくって下さいました。

今回はプログラムの途中でワークショップをはさみ、参加者全員がEmmeさんに「唄」ってどういうものかを全身で教わったことがとても新鮮でした。体を緊張、弛緩させ

てリラックスするレッスン。息を鼻から吸ってお腹の深いところまで空気を送り込み、そこから声を出すレッスン。無心になって手のボールを大きく成長させるレッスン。その総仕上げで「ふるさと」の曲を歌いながら赴くままに手を動かし各々のふるさとの情景を思い出しながらそれを最後のフレーズで手を使って自分の頭から胸の方へ思いを入れる。そうか！唄って口で発するものでなく、体全体を使って気を出したり入れたりする所作だったのかとほんとうに目からウロコでした。

このことですっかりリラックスしたせいか、参加者同士も話が弾み、Emmeさんが唄の時にさり気なく使っている創作楽器や小濱さんの演奏される長さ、太さ、色合いとどれも個性あるたくさん尺八について疑問を投げかけたり、さわったりして積極的に盛り上がりました。

演奏者の心根、企画者のアンテナの広さ、そして自然と調和できる乃平庵のふところの広さ、参加者の素直な気持ちにきょうのこの一日を感謝します。(佐々木真理子)



## 【わんりい活動報告】

2011わんりい新年会

恒例・シュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)を囲んで新年を祝おう！

2011年1月30日 於:麻生市民館・料理室

美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)が呼び物の「わんりい」の新年会が、2011年1月30日、麻生市民館で開催されました。

遅れた方を待って、11時15分にわんりい古参の井田さんの音頭で、新しい年の幸運と、ご出席の皆様の健康を祈念する乾杯、続けて、既に鍋のお湯がぼこぼこ沸騰を始め準備の整ったシュワンヤンロウを頂きながらの交流タイムです。見事に薄く切られたラム肉は、シュワンヤンロウの本場、中国は北京の方も感心する本当に美味しいお肉です。量はたっぷり、5か所に用意された鍋の間を巡って参加の皆さんと近況を語り合っって旧交を温めたりしながらひたすら食べることに専念です。たっぷり食べてお腹が重くなりお箸の動きが鈍ったところで恒例の余興タイム。

東京万馬・馬頭琴アンサンブル団長の永瀬正博さんの馬頭琴やシンセサイザー演奏者の山下孝之さんの手作り

ケーナの演奏、続いてオペラ・バリトン歌手の崔宗宝さんが素晴らしい声で「草原に沈まぬ太陽」。最後は新年会の参加者全員で「故郷」と「春が来た」を山下さんにケーナで伴奏していただき、全員大きな声で楽しく気持ちよく歌いました。

余興が終わった後は、いよいよ新年会のもう一つのお楽しみ、ビンゴと福引に入りました。ビンゴ担当はIさんと京劇俳優の殷秋瑞さんが担当。ビンゴになった人から順に、テーブルに並んだ景品の中から好きなものを選びます。会員の皆様のご協力もあって、実に様々なものが並び、ゆっくり品定め出来ないのが残念でした。

引続く福引は、毎年、コメント付きの番号のついた札を引き、そのコメントに合わせた賞品が当たるという仕組みです。例えば、「今の日本の政治、開いた口が塞がりません」のコメント、曰く、「しばらくはこれで応急処置を」で

使捨てマスク30枚といった具合で、コメントに合わせて出される品物に感心したり、ニヤッとしたり、かと思えば「遅ればせながら還暦のお祝いを」のコメント番号を引き当てたのは、なんとまあ、ケーナを演奏下さったまだ20代の山下さん、赤いちゃんちゃんこ羽織った姿に大笑いしたりと、本当に楽しい時間が過ぎて行きました。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、最後は、K氏の音頭で、一本締めを行い、今年の新年会も無事終了しました。ご参加の皆様は、美味しいシュワンヤンロウ、音楽、ビンゴ、福引に加えて久し振りの知人友人とのおしゃべりを楽しんで、今年一年の英気を養われたことでしょう。

皆様、来年は是非早めにお申し込みを！



第8回留学生トークプラザ：2010年11月7日(日) 主催：(財)町田国際交流センター(担当：国際理解部会)

## アサヒ・スーパー・デアイ

カンバラリエフ・ジャニベック(キルギス出身 国士舘大学・21世紀学部1年)

これからスピーチするわけですが、ビールについてじゃありません。私の日常の、ほんのささやかなエピソード、「アサヒ・スーパー・デアイ」ならぬ、「朝日とスーパーな出会い」です。

ある夜、なかなか眠れないでいました。いろんな問題をどうしようか考えているうち、気持ちが不安になって、いつもなら静かな気持ちにしてくれる音楽を聞いても全然効き目がありません。「ああ、眠れない！」そんな状態が何時間も続いて、私はいらいらし始めました。「あと一時間で眠れなかったら、もう寝るのなんかやめて外の空気でも吸いに行こうか」と思って、ふと窓の外を見たら、いつの間にか、空の雲が紫色に変わっていました。

「起きるんだ！起きるんだ！朝日を見に行くんだ！」と自分に言いました。急いで起き上がり、一応顔も洗って、急いで家を出ました。もうそろそろ太陽が昇り始めるころでした。でも周りの建物が邪魔をして、見えません。どこか高いところからだったら、と思って、走りだしました。

走りながら、前の日、電車で遅れそうになって大あわてで走ったのを思い出しました。おんなじように走りながら、「でも、ちょっと違うな」と思いました。あせった気持ちじゃなくて、わくわくする感じだったんです。「電車は待ってくれないけど、太陽はきっと待ってくれてるにちがいない」と思いました。

やっと高台に上がると…うわーお！ちょうど朝日が昇ってくるころでした。はるかな地平線の向こうから新しい命が生まれてきています。ものすごい活力とともに新しい一日が始まったのです。朝日を浴びて、今までずっとだるかった体にどんどん元気が出てくるのを感じました。息をつめて、景色を眺めていましたが、美しい朝日

は、やがてうす雲にかすんでしまいました。でも、一瞬でも私に挨拶するために顔を見せてくれたのがうれしかったです。こうして初めて、「日本」というその名の通り、日のもとで朝日を出迎えることができたのです。

そして、もう元気いっぱいになった私は、そのままうちに戻らないで、そのあたりをちょっとぶらついてみることにしました。コンビニに寄って、一番安いヤマザキパンとリプトンティーを買い込み、緑に囲まれた運動場のベンチに座って、朝ごはん。ただのパンと紅茶なのに、とってもおいしかったです。吸い込む空気もフレッシュです。犬とその飼い主が散歩しているのを眺めているうち、またいろいろなことを考えはじめていました。でも、朝方までとは違って、気分はなんとなく明るく楽観的な感じでした。

町も目が覚めたのか、だんだんにぎわってきました。腰を下ろしたまま、しばらくそのままいたら、ふいに、感動がこみ上げてきました。「ぼくは生きているんだ」と思ったその瞬間、私は、今この時とこの場所こそ自分の人生なんだと実感したのです。(原文のまま)

### 懇談会「キルギスってどこ？どんな国？」

留学生3人の母国紹介と懇談にご参加を  
ジャニベックさんを含む3名の留学生とお話ししよう！

2011年3月12日(土) 14:00～16:00  
会場：町田市民フォーラム4F講習室(定員：40名)  
参加費：無料 申込期限3月4日

主催：(財)町田市国際交流センター(担当：国際理解部)  
申込方法&問合せ：(財)町田国際交流センター

☎047-722-4260(日曜・祭日を除く9:00～)

四川省奥地の街、理塘郊外にある怪しい鍾乳洞の岩山への再訪……。うっかり忘れていたくらい数年越しの願いが叶うとあり、喜びと期待に胸を弾ませていた私ではあるが、車が街から離れるにつれて薄っすらと不安も頭をもたげて来た。ある程度運転手の人柄も見定めた上で乗り込んだとはいえ、やはり郊外に出向くタクシーの中に女一人で乗っているのは、あまり気持ちの良い物ではない。

やっぱりさっき宿で見かけた日本人に声をかけてくれば良かったなー。だがそっと伺い見た小柄なコメディアンのような容貌の運転手は、そんな私の心中など露知らず、ステレオから流れてくる陽気な歌謡曲を口ずさみながら身体を揺すり、半ば踊りながらハンドルを握っている。悪気のかけらもなさそうな運転手の様子に思わず苦笑がもれた。これなら大丈夫そうだ。だが、それにしただって自身の安全の為にもこの道中を楽しく過す為にも、彼と仲良くなっておくに越した事はない。

運転手の歌に合わせて助手席の私も一緒に踊り、「中国の歌なら私も唄えるよ!!」と頼まれもしないのに自分の歌声まで披露して、二人しか乗ってないのにやたらと賑やかな車は、程なくして見覚えのある岩山の前に到着した。岩山に至る小道の入口にはツノ付き牛のしゃれこうべが積み上げられ、白く乾いた骨の山に巻きつけられた色とりどりのタルチョが風に吹かれている。……怪しい。そんなチベット仏教のどこか怪しい雰囲気は大好きだ。

うわわわわ〜〜い!!!

弾む気持ちを押しきれずに岩山の側面に口を開けている、洞窟の入り口まで駆け上がった。ワクワクしながら暗い鍾乳洞の中を潜り抜け、岩山の向こうに顔を出すと、眼下には先ほど車で走ってきた道路がどこまでも続いていくのが見える。

ばんざーい!!! 本当に此処に戻って来れたんだ!!

アリの巣のように枝分かれした洞窟内を好きに見て回っていると、後からやって来た運転手が「ダメダメ! ここはこっち側から入って向こうに抜けなくちゃ」とか「この穴はこっちから入って足から上の穴が抜けられたら幸運が付くんだ」などと解説してくれる。なるほど怪しい神山だけあって、岩山のあちこちに色々と言ひ伝えやいわくがあるらしい。そんな解説が聞けるのも地元の人と一緒にならではだ。言われたとおりに穴をくぐろうとしてみたが、幸運を手にするのはやはりそう簡単にはいかないらしい。あまりに厳しい体勢を強いられて私はあっさり諦めたが、お供で来た筈の運転手はいつの間にか私より熱心になって、服を汚し額に

汗を浮かべて頑張っている。

手前の洞窟をじっくり見て回った後は更に山の奥に進み、陽気なガイドは先に立って山のあちこちにある岩穴を案内しては、ここでこれができたら一生平安、ここでこうすれば一族繁栄など、その場その場での課題を解説してくれる。途中、両親と娘で遊びに来ていたチベット服姿の三人家族と合流し、総勢5名でわあわあ騒ぎながら、平安や繁栄を願い代わるがわるに岩穴を登ったり潜ったり、地面の穴に手を突っ込んでみたりした。

大人の手がやっと差し込める、肘丈程の深さのその穴は、誰がいつ入れたのかビー玉や髪飾り、薄汚れたりボンヤその他の小物が仕込んであり、何がつかみ出せたかで今後の運勢を占えるのだそうだ。言ってみればおみくじのようなものだが、取り出した小物が何を意味するのか明記されている訳でもなく、私とチベット家族はどう見ても適当に喋っている感じの運転手の解釈を聞いてお茶を濁し、彼自身は穴の中から汚れた少額紙幣をつかみ出して「こりゃ金運がいい運勢だ!」と勝手に喜んでいた。

岩山のほぼ山頂にあった穴おみくじが終了すると、お参りポイントも尽きたようで、そのまま山の裏手に下り裾野をグルッと半周して出発点に戻ると、このちょっとおかしな岩山詣も終了した。陽気なガイドのお蔭で思った以上に楽しんでしまい大満足である。

チベット家族と別れて再び車に乗り込んだ私達は、先ほど走ってきた道を理塘の街に向かって引き返し始めた。太陽は上空高く輝いていて、一日はまだ長い。せっかく運転手とも仲良くなった事だし、これで帰ってしまうのは物足りなく思っていたところに、運転手の方も「他に行きたい場所はないのか?」と商売っ気を出してくる。「ゴンパ(寺)はどうだい?」だがお寺は既に北京軍団と一緒に訪れていたし、理塘の事など殆ど知らないのに、行きたい場所なんて……と、思ったところで突然、稻城最後の夜、一緒に夕食を食べたりー・ルー・ハイの言葉が閃いた。

「稻城の人間が死んだ時、遺体は理塘に運ぶんだ……」

「ねえ、チベット族が亡くなったら、その身体は鳥にあげるんでしょう!？」

運転手は突然何を言い出すのか?と言った顔をしてみせたが、「そうさ」と頷いた。

「その場所が理塘にあるって聞いたんだけど、あなたの車で連れて行ってもらえる?」

「20元だな」

「お得意様なんだから、まけなさいよ！ 10元ね!？」

せっかく掴まえたお客を逃したくないのと、岩山詣で仲良くなってしまった弱みなのか、運転手は苦笑しながら頷いた。

一旦理塘の街なかに戻ったタクシーは、そのまま街の中心を横切るように通り抜けると茶色いチベット式住居の密集する街の裏側に出た。通りを少し走るとじきに民家も尽きて、あとは丘陵と草原が広がっているだけだ。運転手は

「もうすぐだぜ小姐、あんた恐くないのか？」とわざと脅すような口調で話しかけてくるが、目に入ってくるのは高い青空と緑の絨毯につつまれた明るい草原である。「ぜーんぜん」私は笑いながら首を振った。

しばらく行くと道の正面には草原が小高く盛り上がった丘があり、そこで道は終わっていた。少し離れた丘の斜面に祈祷旗の一種である布が張ってある以外、その場には特に宗教的な儀式を意味するような物もなく、ただ三方を緩やかな丘に囲まれた草原地帯が広がっているだけだ。

「ここなの？」

ちょっと拍子抜けしたような気分にもなった私だが、車を降り正面の丘に向かって歩いていく運転手に付いて辺りを散策していると、突然運転手が脅かすような声色で言った。

「小姐、見てみろよ。あんたが今立ってる場所に散らばってるのは人の骨だぞ、ひいひい〜」

え!? 思わず足元を見おろすと、確かに私の足下の地面には白い陶器が砕けたような、小さな小さな破片がたくさん散らばっている。

「これ人の骨なの!？」

「そうさ、鳥が食べやすいように細かく砕いた人間の骨のかけらだよ、恐いかい?・・・うひひひ・・・」

理屈ではそこが何処だか判っていても、日本人的な感覚として運転手の言葉が俄かには信じられず、私はその場にしゃがみ込んでしげしげと小さな白い破片を見つめた。小さな白いカケラの質感は、やはり陶器などではなく骨片のようだ。いや、そこが鳥葬場である以上、骨以外の物が散らばっている方が珍しい筈で、やはりそれは間違いなく人骨の破片なのだ。

これが日本の話であれば、そんな物が野山に散らばっているなど考えられない事で、もし仮に見つかれば即刑事事件に発展しての大騒ぎになるだろう。それを思うと不思議な気持ちはしたが、白く乾いた小さな骨片から生命の名残のような物は全く感じられず、そこには恐怖も

畏怖も嫌悪もなかった。

私の足下に野晒しになって散らばっている骨の破片は、今となってはその遺族にさえ特別な意味など持たない、ただのカルシウムの塊なのだ。こうして風に吹かれ雨に溶かされ、いずれ地面に吸収されていくのだろう。鳥の餌となり空に舞い上がった肉体も、やがては形を変えて地表に帰ってくる。自然から与えられた肉体は役割を終えると再び自然に還され、後には何も残らない・・・これまで知識として頭の中にはあっても、現実味の感じられなかった鳥葬の存在に初めて直面した私には、その潔さと儚さは好ましいものとして感じられた。結局人間なんて、何だかんだ言っても自然の一部であり、この地球の上で生かされている動物の一種に過ぎないのだ。それがこれほど強く意識されたのはこの時が初めてだった。

骨の存在に気付いてから気をつけて地面を見ていると、あちこちにそんな骨片が固まってちらばっている場所がある。その脇には理塘寺の門前で見かけたような、経文の掘り込まれたマニ石が草の上に置かれている場所もあった。

「ほら、見てみなよ」

運転手が指さした地面には大きな鳥の羽が落ちていた。「こいつらが人間を食べるんだぜ」

抜け落ちていた羽は50センチ程もあり、その大きさからすれば、ずいぶん大きな鳥に違いない。しかし、空を見渡してみても見えるのは青空に浮かぶ白い雲ばかりで、そんな鳥がこの辺りに沢山いる気配は感じられなかった。

しばらくその場を歩きまわっていると、いかにも腰掛けるのに具合の良さそうにてっぺんの窪んだ円柱形の石が立っているのが目に入り、朝から歩き続けて気付けば結構くたびれていた私が、吸い寄せられるように石に近づき腰掛けようとしたその時、運転手が大声を上げた、

「小姐！そこに座っちゃダメだ——!!」

思わず飛びのくように落しかけた腰を跳ね上げると、運転手が言った。

「その石は人間の頭蓋骨を載せて、砕く場所なんだぞ」成るほど・・・石のてっぺんがちょうどすり鉢のように窪んでいるのはそんな訳だったのか・・・周りをみまわすとところどころに同じようにゆるく窪みのついた石があるのが目についた。

一見ただの草原の丘陵地帯にしか見えなかったその場所も、細かく観察していると、確かにそこが鳥葬場なのだという事実が序々に実感として伝わってくる。突然頭上でバサバサッと大きな羽音が響いてビクっとした私が

空を見上げると、動物園でしか見た事が無いような大きな鳥が一羽、むこうの空に飛び去って行くのが見えた。

そんな時である。私達が先ほど走ってきた道を一台の乗用車がやってくるのが見えた。道はこの鳥葬場で行き止まりだし、もう午後遅い時間だ。今頃いったい何をしにやって来るのだろう。停車した車からは一人の僧侶と2、3人の男達が降りてきた。私達の立っている鳥葬場の丘に登ってくると僧侶は何やらおまじないのような仕草をしていたが、じきに一緒に来ていた男達が地面に杭を打ち込み、僧侶はお経を唱え始めた。「彼等はいったい何をしてるの?」私が尋ねると「鳥葬の場所を決めるんだ」運転手は言った。僧侶が占いで良い場所を選び、その場所の目印に杭を打ち込んでいるのだという。

「え!?! じゃあその葬儀はいつやるの!?!」

「それは俺には判らないさ、明日なのか一週間後か」

だが鳥葬は確かにこの数日間のうちに行われるのだ。さっきまではこの場に來られた事だけで満足していた私は、それを知ったとたんに、この目で実際に鳥葬を見て

みたいという思いが強烈に湧きあがっていた。

僧侶がお経を唱え終り、草の上に腰掛けて一休みしていた彼等に運転手が話しかけた。チベット語で交わされている会話の内容は私には全く解らない。彼等が話している間、私は僧侶を連れてやってきた男達の姿を観察した。

亡くなった人の遺族だろうか? 運転手と話している男の姿はツバのある帽子をかぶり、ブーツにジーンズと、そのいでたちはやはりカーボーイ風だ。腰には30センチほどもある大きな短刀の黒い鞘をぶら下げているのが目をひいた。浅黒い顔は強面だが話している表情や目が優しい。以前同じ職場で働いていた外国人の友人と面影が重なるところがあり、既に帰国した友人の事などをぼんやり思い出していると、彼等と話していた運転手が突然私に向かって言った。

「小姐、彼等の葬儀は明日らしい。明朝ここにくれば、鳥葬がみられるぜ」  
(次号に続く)

## 《'わんりい' 掲示板》

### 日本で活躍の中国画家五名による中国画作品展 東京画派五人展 (入場無料)

出品作家: 金醒石、馬驍、江屹、王子江、張馳

会場: 東京中国文化センター

港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F 銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩7分

会期: 2011年3月8日(火) ~ 15日(火)  
10:30 ~ 17:30 (最終日: 14:00まで)

#### 【席画会のお知らせ】

同会場にて中国画家・金醒石氏による席画会(即興で描く、実演)を行います。

▲日時: 3月10日(木) 14時30分 ~ 16時30分  
申込み不要。当日直接会場へお越しください。

▲主催: 東京画派 ▲協賛: 黄山美術社

問合せ: ☎03-6402-8168 東京中国文化センター

#### 【わんりい春の特別講座】(わんりいHP案内板参照ください)

叶霖さんと一緒に作る **楽しい春のお弁当**  
(参加会費: 1500円)

「わんりいの四字熟語のイラストでおなじみのイエリンさんはキャラクター弁当のコンテストで何回も受賞しています。

2011年3月10日(木) 11:00 ~ 14:00

会場: まちだ中央公民館6F・調理室

JR横浜線「町田駅」ルミネ口徒歩3分/小田急線「町田駅」南口徒歩分

▲可愛いお弁当箱に詰めた手作りのキャラクター弁当のお土産付きです。

▲イエリンさんに楽しいお弁当作りのコツなどお伺いしながら一緒にお昼を頂いて交流しよう! (スープ・サラダ・コーヒー付き)

募集人数: 若干名

持ち物: エプロン・筆記用具

申込&問合せ: ☎042-734-5100 わんりい



←ソーセージを  
組み合わせた  
可愛いハート

### 里山ガイドウォーク & 崔宗宝コンサート

2011年4月23日(土)

●Aコース(小野路ガイドウォーク&コンサート): 2,000円  
小野神社前8:45集合、9:00出発、6km/所要約5時間、定員20名

●Bコース(三輪ガイドウォーク&コンサート): 2,000円  
小田急線鶴川駅前8:45集合、9:00出発  
5km/所要約5時間、定員20名

●Cコース(コンサートのみ)

会場: 鶴川市民センター・ホール

〒1195-0062 大蔵町1981-4 ☎: 042-735-5704

交通アクセス: 小田急線鶴川駅0番「野津田車庫」行き、「下大蔵」下車徒歩約5分、1番「若葉台駅」行き「鶴川市民センター前」下車徒歩1分)

神奈中バス時刻表検索 <http://dia.kanachu.jp/bus/viewtop>

14:30開演(14:00開場)

公演時間: 1時間30分

定員: 200名(Aコース・Bコース参加者を含む)  
参加費: 1,000円 学生500円

▲A・Bコースは保険・ガイド料・資料代・昼食弁当代・コンサート参加費を含む。▲A・Bコースの鶴川市民センターまでのバス代は各自負担する。▲小雨決行(一部コースの変更有)。荒天の場合でもコンサートは実施する。▲コンサートへの小学生未満の参加はできません。▲各コースとも定員になり次第締め切る。

●問合せ: ☎0042-850-9311(町田市観光コンベンション協会)

#### 使用済み古切手と書き損じのハガキでご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

【3月の定例会】◆定例会: 3月8日(火) 13:30 ~ (田井宅)

◆4月号おたより発送: 3月29日(火) 13:30 ~ (田井宅)